2024年度イラン短期研修プログラム 報告書

東京外国語大学 国際社会学部 3年

土屋京香

1. はじめに

2024年2月、公益財団法人笹川平和財団主催のイラン短期研修プログラムに参加し、イラン国際関係学院（SIR）の学生との交流や外務省等への表敬、テヘラン、エスファハーン、カーシャーンの視察を行った。私はこれまで一度も中東に足を踏み入れたことがなく、専門も教育学である。そんな私が今回の研修に参加した理由は、政治や経済ではないイランと日本の繋がり方を模索するためである。私の活動軸は、各国、各地域、各人に合った目線の「国際交流」を行い、世界各地の子どもたちの架け橋をつくっていくことである。イランと日本の間には様々な課題や障害物が存在する。そのような状況のなかで、両国の次世代が繋がることにはどんな意義があるのかを確認し、そしてそれを実現させるための足がかりをつかむため、イランへ渡航した。本報告書では、そのような想いのなかで得た学びや気づきをまとめている。

2. 中東の視点

私がいかに西洋からの視点、日本からの視点で中東をみていたか。これは、イランで毎日指摘されることでも、自分自身身に染みて感じることもあったが、最初にはっきりと意識したのは1日目だった。様々な場所を訪問し、多くの方々の話を聞いた研修であったが、その中でも乗り継ぎ地カタールでのアルジャジーラ訪問はかなり印象に残る経験となった。アルジャジーラの研究所でお話を伺った際に、パレスチナ問題におけるイスラエルへの見方や仲介者としてのカタールの可能性についてお聞きし、中東がどのようなダイナミクスで動いているのかをアラブ諸国やアルジャジーラからの視点で理解することができた。なかでも、「トルコやシリアは民主主義的政権を求めている」とか「最もテロリスト的政府はアメリカとイスラエルである」という発言はとても印象的だった。「国民国家」という概念と中東地域の整合性に関し質問をすると、その概念が2つの世界大戦によって中東地域に強制的につくられたものであり、アラブやシーア派といったものが国境によって分けられてしまっているため、中東の紛争や対立が解決できないことを述べていた。現在の中東の状態を、ポストコロニアル時代が続いており、独立できていない状態だと説明し、その解決に対しては、「誰かが解決策を思いつくことを願っている」と述べていた。

一方、イランではイランなりの視点を学ぶことができた。イランの外交政策に関する

講義では、イランの特殊性として、15もの隣国に囲まれていることや「独立、自由、イスラム革命」が人々の中に刻まれていることを挙げていた。この特殊性のうえに立ってみると、イランの外交や人びとの考え方をずっとよく理解することができた。視察ではイラン人のプライドに関わる長い歴史に触れた。カーシャーンの7500年以上前にさかのぼる古代遺跡やエスファハーンのマスクや宮殿の数々を訪れ、イランの今と過去がいかに人々のなかで強く結びついて、連なるものとして捉えられているかを実感した。実際に訪れると、まるでタイムスリップをしたかのような感覚に陥り、五感で味わうと言葉を失ってしまうほどの美しさであった。SIRの学生をはじめ、たくさんの方とお話するなかで、イランの特殊性や、世界を繋ぎ、引っ張っていった歴史・文化が、今日の人々の価値観に直結していることを発見した。

中東に対し、日本や西洋のメディア、人びとは「複雑」「危険」「理解できない」といったキーワードでまとめ、そのような視点のみから見てしまうことがある。講義のなかでも言われていたが、思いこみや偏見が世界各地で交錯している今、単純化や簡素化を避けるために様々な視点を持ち合わせる事が非常に重要である。中東からの視点で物事をみると、語りは大幅に変わった。今回の渡航において、できる限りの人と話すことで、中東の視点を一部であったとしても獲得できたことは大きな収穫である。

3. 個への焦点

アルジャジーラにはこのような言葉がビジョンとして廊下にかかれている。「To be fearless in the pursuit of truth and to be the voice for the voiceless（真実の追求を恐れず、声なき者の声になること）」。アルジャジーラのディレクタージェネラルも、アルジャジーラが大切にしている報道姿勢として、世界にいる多くの人が関心ごとや懸念を伝える機会がないため、自分たちが出向き、機会を与えるのだと言っていた。人々の働く様子からも、グローバルな視野をもちつつも、草の根に目を向けるプロフェッショナル意識が感じとれた。

加えて、イランの街なかでの出会いも私にとっては、この研修における重要な学び、経験となった。イラン1日目から、テヘラン、エスファハーンに関わらず、たくさんの中高生、大学生の女の子たちから声をかけてもらった。そこでは、彼女たちの日常や夢をシェアしてもらい、メディアや組織的視点では見ることのできない声に出会うことができた。日本語を勉強している子や日本の文化が好きな子も多くいて、ぜひいつか日本に来てほしいと心から願う瞬間だった。同時に、イランの方たちと話していくなかで、イラン人がもつ「強さ」に何度も触れた。各人に信じているものがあり、それを守るために戦う勇氣ももっていた。この「強さ」が制裁のなかでも生活を保っている理由であり、革命や運動を通し、大統領や最高指導者がいるなかでも国民がベースとなっている背景だと考えた。この「強さ」は年代を問わずもっており、街で出会った女の子たちからもSIRの学生

からも学ばせてもらい、刺激を受けた。

ただ、同時に、イラン人が信じているもの自体は多種多様であった。現在のイランに対しても、自分の将来に対しても、様々な意見があり、その多様性や連続性は「イラン」全体の構図からは見ることのできないものだと、人々との交流を通して気づいた。これこそが、アルジャジーラで言っていた「聞こえない声」であり、私が拾っていききたい、気づいていききたい「声」だと研修を通して強く思うようになった。

4. おわりに

本研修は、約10日間とは思えないほどの学びと経験をした、非常に内容の濃いものであった。渡航前に立てた問い「イランと日本の次世代が繋がることの意義」の私なりの答えは、イランの一人一人に焦点を当て、声を届けることである。その声は、日本の子どもたちにとっては世界を知るための視点になり、かつ自己成長を促す大きな刺激となるだろう。一方、イランの子どもたちにとっては世界と繋がる窓となるだろう。加えて、今回の研修を通して、中東およびイランの視点が、日本人が慣れ親しんだ視点とは大きく異なることを実感した。だが、SIRの講義から、2つのことに留意することで、様々な視点によって対話が生み出されることを学んだ。1つは、普遍性を認識することである。互いにもつ共通点にしっかりと目を向けることで異なった視点や語りも「理解すること」が可能になる。もう1つは、特殊（particularity）を異常（peculiarity）としないことである。各国、各地域、各人がもつ特徴を奇妙や異質だと見てしまうことで、非人間化してしまう恐れがある。これら2つの留意点を体験しながら学ぶことのできる機会が国際交流である。「違い」と「共通点」を教え合い、学び合い、共有し合い、そして未来への対話を始める。それは、今回の研修で私たちがSIRの学生としたことであり、そして多くの子どもたちにもぜひ機会を与えたいことである。実際に渡航をすることで、イラン側のカウンターパートを見つけることができた。今年中の実現を目指し、外交や経済ではない、大人ではない子どもたちの繋がりが生み出すインパクトを信じ、目にしたいと考えている。私の約10日間の経験が、次世代の多くの子どもたちの経験へと波及していくことを、そのためにしっかりと学びを形へと活用していくことを自らに期待している。

最後になりましたが、イラン短期研修プログラムを実現させてくださった、支えてくださった全ての方に心より御礼申し上げます。

（なお、本報告書の内容はあくまで執筆者の個人的な見解であり、所属組織や本研修主催団体の見解を示すものではありません）